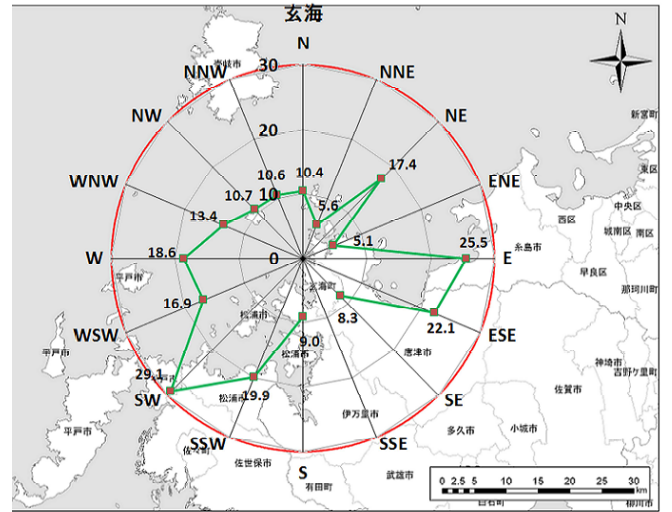
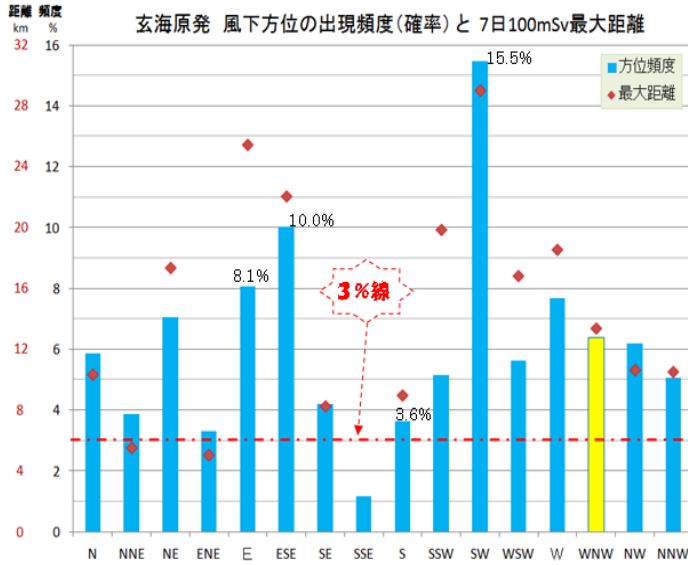


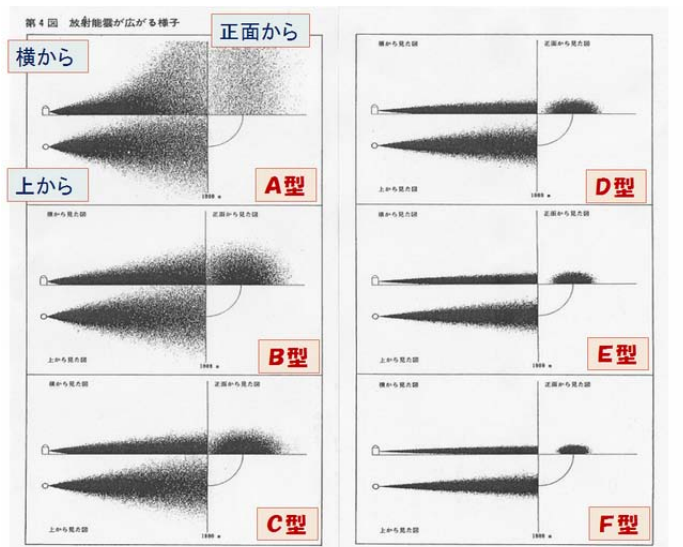
# 方位出現頻度—7日100mSv最大距離 見かけ上の相関（玄海原発）



サイト出力に対応した放射性物質量を仮定した計算

風の年間方位出現頻度と7日間で100mSv被ばくする最大距離との間に相関が見られる(上左図)。どの方位にも同じ全放出量が流れた結果なのに、なぜ方位出現頻度が高い場合は最大距離(または被ばく線量)が高く、逆に低い場合は低く、特に出現頻度が3%未満のときは被ばくなしとなっているのだろうか。

このからくりは、下記に示すように、「97%値」を採用したことにある。方位出現頻度が低い場合、97%値はゼロでない被ばく線量の低い側の値を採用することになる。方位出現頻度が3%未満のとき、97%値はゼロになる。100%値を採用すれば、方位による差は縮まるに違いない。



(瀬尾健「原発事故 その時あなたは」より)

## 方位ごとの8760個の被ばく線量

### 97%値と100%値

方位頻度が小的时候97%値も小

